

松崎 昇

キリスト教における悪魔

序

悪の存在

人類がその発祥以来、悩まされてきた問題が、悪の存在ということである。

ここでいう悪とは、倫理的な意味の悪（道徳悪）^{*1}だけでなく、広く人間を苦しめる一切のもの（物、現象）のことである。（別の言い方をすれば苦）

自然現象（地震、洪水、暴風、干ばつ、長雨、噴火、猛獣、疾病）、他民族からの攻撃・圧政、権力者同一集団内の他セクトからの肉体的・精神的攻撃、敵意ある個人からの肉体的・精神的攻撃、などなどは、しばしば（いや、それどころか常に）襲ってきて、人間を苦しめた。その苦痛を受ける個人から見て、その殆どが理由なく不条理に襲ってくるものであった。

人間は、これらの悪の原因を種々推測し、原因を規定することによって納得しようとした。^{*2} それによって苦そのものを解消することはできないが、不条理さが和らげられ、諦めの境地に達しやすい（？）のであろう。（もちろん、悪そのものに備えて防衛し、あるいは攻撃してこれを消滅させるなどの積極的な方策も考えられるところであり、人類はそれに努めてきたし今も努めているのだが、古代、中世においては、そういった手段で有効なものはないのであった。）

そこで思いつくのが、悪をもたらす超自然的な存在である。

悪魔の定義

ところで、ここで一応、悪魔を定義すれば、「宇宙的悪の単数人格化」（ラッセル）である。宇宙的悪という意味は、宇宙（世界といってもよい。）に存在するあらゆる悪の根源であるということである。それだけの大きさと、力を有しなければならない。また、人格化は単一の人格である。様々な神話、伝説に出てくる悪鬼、魑魅魍魎、怪物、魔女、その他は複数であって、悪魔の範疇に入らない。（その有する力という点においても宇宙的悪というには足りない。通常、これらの存在は、悪魔の手先として現れる。）

また、人格化ということは、人間並みの喜怒哀楽を有し、行動も人間として理解できる動機、性質、様式、を備えているということである。さらに姿を現すときには、人間の形もしくはそれに近い形を取るということも含まれる。

*1 道徳的悪： ラッセルの定義によれば、道徳的悪とは、知性あるものが知りつつ故意に他の知覚力（知性？）あるものを苦しめることである。

*2 このような悪（苦）の影響を避ける（もしくは軽減する）方法として、その原因を特定して納得するという方法の他に、別の方法も考えられた。例えば、仏陀は精神的修養によって、苦そのものを解消する（苦を苦としない精神状況に到達する）という方法を考え出した。

また、悪魔の存在は、いわば論理必然的に神の存在を前提とする。^{*3}ここでは、ごく一般的な神の定義を使用するのが便宜と思われるので、「宇宙（世界）全体を支配する超越的存在で、人知ではかりがたい力を持ち、人類に様々な影響を与える存在。」としておく。

*4

悪魔の歴史（キリスト誕生まで）

古代における悪魔

このような悪魔は、古代世界にはまれな存在だった。わずかにマズダ教（ゾロアスター教）、古代ヘブライ教、キリスト教、イスラム教の四宗教にその観念が存在するに過ぎない。古代ギリシャ、ローマ帝国の宗教ないし神話に、悪の単数人格化の概念はなかったし、ヒンズー教、仏教にも、過去現在を通じて、この概念はない。^{*5*6}

ヘブライ教とキリスト教の悪魔についていえば、ラッセルによれば、「特定の古代文明が、ユダヤ・キリスト教の悪魔の概念に関して、直接的な歴史的背景をなしている。」という。そして、代表的なものは、エジプト、メソポタミア、カナン^{*7}、ギリシャの文化であるという。以下にこれらを概観する。

エジプト

*3 神と悪魔

「神は絶対者に近づけば近づくほど、より強力でより善良、かつ普遍的になるが、同時に、神にとって悪魔の存在は、もはや必要不可欠のものにならざるをえない。」（J・ミノワ）のであるが、悪の具現者である絶対者というものも、それ単独では考えられない。まさに「このカップルに別れ話はいりえない。」（同）のである。

*4 神

全能、善、宇宙の創造者といった属性は、大多数の神の属性であるが、必ずしも必然的なものではない。

*5 仏教の悪魔

仏教にも、修行中の仏陀に、修行は無駄であると誘惑する悪魔（魔羅）という存在に言及する物語（経）が存在する。しかし、それは、仏陀の妄想のことであるとされている。（別の解釈もあって、出家に悪意を持ち、嫌がらせをするバラモン他の世俗的な人を指していったものであるとする。）

*6 悪魔の概念を持つ宗教

ラッセルは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の伝統が本質的に悪魔の概念を作り出したとしている。

*7 カナン

地中海、ヨルダン川、死海に三つに囲まれた地域をいった。旧約聖書では「乳と蜜の流れる場所」といわれている。また、神がアブラハムの子孫に与えると約束した土地（約束の地）でもある。

エジプトには多くの神々が存したが、中には悪神セトのような存在もいて、善神のホルスやオシリスなどと抗争をくり返すが、エジプト人の宇宙は、対立物の安定した共在であって、善神と悪神の対立も、それ自体が秩序と調和であるととらえられる。従って、最後には善神が勝利して悪神が減びるという筋書きはない。ただ、善神と悪神の戦い自体は、後のキリスト教における善悪の戦いのモデルともいえるものである。

メソポタミア

エジプトより自然の災害が激しく、かつ人間の闘争も頻繁であったメソポタミアにおいては、宇宙を安定なものとする宇宙観は起こりえなかった。エジプト人は、神聖な調和に悪が侵入している世界を説明しなければならなかったのに対し、シュメール人とバビロニア人は、調和が殆ど見えない世界を説明しなければならなかった。いろいろの災厄をもたらす敵意のある悪霊たち（デーモン）がいて、彼らに対抗する勢力として、善神の力は全く信頼されていなかった。のち、夜の魔女として中世のキリスト教世界に登場するリリスの前身リリトもここで誕生している。^{*8}

カナンの神話では、至高神のエールの息子パールが死の支配者であるモト神とが戦いを繰り返す、一方が他を倒しても他方は生き返り、永遠に善と悪が死闘を繰り返す。

注意すべきは、これらの宗教は、善神、悪神が存し（一神教ではなく多神教^{*9}）、いずれにも優劣をつけていないが、全て一元論^{*10}である。つまり、悪が、善である神の一

*8 リリス (Lilith)

リリス(Lilith)は、ユダヤの伝承において男児を害すると信じられていた女性の悪霊である。リリトとも表記される。通俗語源説では「夜」を意味するヘブライ語のライラー(Lailah)と結びつけられるが、古代バビロニアのリリトゥ(後述)が語源とも言われる。

旧約聖書では『イザヤ書』34:14に言及があるのみで、そこではリリス(標準ヘブライ語ではリリト Lilit)は夜の妖怪か動物の一種であった。古代メソポタミアの女性の悪霊リリトゥがその祖型であるとも考えられている。ユダヤ教の宗教文書タルムードおよびミドラーシュにおいては、リリスは夜の妖怪である。

しばしば最初の女とされるが、この伝説は中世に誕生した。アダムの最初の妻とされ、アダムとリリスの交わりから悪霊たちが生まれたと言われる。

現代ではリリスは女性解放運動の象徴の一つとなっている。

*9 一神教／多神教

一般に一神教と言えば、唯一絶対の神を信仰する唯一神教を指し、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教に代表される。

多神教は一神教と対照されるが、実際には両者の区分は明白ではなく、単純に部族の唯一神を信じる一神教でありながら、同時にいろいろな土着の精霊などを信じる場合もある。全体として、教義的には時代とともに多神教から一神教への整理が行われる

*10 一元論／二元論／多元論

世界のすべてのものは二つの原理から成立しているか、あるいは説明できるとする理論が二

面なのである。

ゾロアスター教^{*11}

ゾロアスター教に至って、初めて明瞭な二元論の宗教が生まれた。

ゾロアスター教は、神の完全な善性を保つため、神の全能と単一性を否定した。始原において善神オフルマズド（アフラ・マズダ）と悪神アフリマンとが別個に誕生した。アフリマンが好戦的なものに対し、オフルマズドは、闘いに消極的である。しかし、最終的にはオフルマズドが勝利することになっているが、現在は、両者の何度かの闘争の結果である。不完全ながら一応善が優勢である。とはいえ、人間の性質には、オフルマズドの善性、欠陥のある先祖の残忍性、アフリマンに発する悪性のいずれもが備わっている（つまり、完全なものではない。）。さらに、アフリマンは、常に人間を誘惑し、自分の勢力を確立しようと画策している。最終的には、オフルマズドが勝利し、悪の力は封じられ、オフルマズドは無限、永遠、全能のものとして君臨することになっている。

ギリシャ・ヘレニズム

ギリシャに、紀元前6世紀頃に、タイタン族とゼウス神の闘いの神話を基盤として、タイタン族に起因する肉体と、ゼウス神とその息子に起因する霊の二つを有する人間の種族が誕生し、人間においては、不死の魂が、死すべき肉体に捕らわれているという信仰（オルペウス教）が発生した。悪しき霊の力を受ける肉体と物質、善なる霊の支配を受ける魂（肉体が宇宙的な悪の産物であるということに通じる。）という観念がマズダ教に結びつき大規模に広まった。この観念は、ユダヤ教、キリスト教、グノーシス主義に影響を及ぼすことになる。

さらに、プラトン主義者たちは、「現象界が、真のイデア界を適切に反映することはあ

元論で、原理を二つ以上立てるのが多元論である。これに対し、一元論は、複数の原理が主張されても、それらを異なったものとはみなさず、同一の原理が複数の形態に変容したものだと考える。万物の原理を水としたタレス、また、それを空気としたアナクシメネスに世界の一元論的説明を見ることが出来る。ゾロアスター教、マニ教は善と悪、光と闇の二元論を前提にしている。

*11 ゾロアスター教

ゾロアスターを開祖とする宗教。主神オフルマズド（アフラ・マズダ）の名から「マズダ教」ともいい、火を神聖視するため「拝火教」ともいう。ササン朝ペルシア時代に隆盛をみたが、イスラムの興隆とともに衰微。現在信徒はインドのムンバイを中心に約10万人、中部イランに約1万人など、総計で15万人程度。

古代イランの土俗的信仰を基礎に、善神マズダと悪神アフリマン（アーリマン）の二元論的構造をもつ宗教。世界を善神と悪神の戦場とみ、世界の歴史を1万2000年とし、それを4期に分割。第1期はマズダ神の精神的創造期、第2期は物質的創造期、第3期にアフリマンが登場、第4期はゾロアスターが支配。来世には信者ののぼる天界と非信者の落ちる地獄とがあるが、善悪神の戦いの勝者となる善神により、すべての人々が最後には救われるとされる。その教理はのちにマニ教にも取入れられた。

り得ないので、不可避免的に完璧に達することはあり得ない。そこに悪が存在する余地がある。」と考えた。つまり、悪には真の存在はなく、単に善の欠落あるいは喪失があるにすぎない。それは、造物主から悪の責任を取り除くと考えた。ギリシャ人は、神と悪について神話に変わって哲学を作り出したことで、神学を發明したといってもよい。

また、ギリシャ人は、悪の霊に関して、呼称上の寄与をなしたといえる。悪魔という意味でよく使われるデーモン（ギリシャ語ではダイモーンもしくはダイモニオン）という言葉は、元々悪とは関係のない霊のこととされていたが（例えば、ソクラテスを導く霊はデーモンとされた。）、プラトンの弟子が、悪霊という否定的な意味を持たせた。紀元前2世紀に成立した70人訳聖書^{*12}もこれに習ってヘブライ人の悪霊を指す言葉として使われた。

古代ヘブライ教

ヘブライの神と悪魔とがいかに考えられてきたかを知るには、もちろん、旧約聖書の記述によることになる。ヘブライ教は、当初から世界の全てを、それが建設的なものであれ、破壊的なものであれ、単一の神に属するものと考えた。つまり、一神教であり、かつ、一元論であった。宇宙全体に対して責任があり、宇宙の善悪両面の価値を反映する内的な対立物の共在と理解されていた。旧約聖書中に、この神の両面性を示す文は、数十カ所指摘されている。

(例)：「見よ。我は災いをすべての民に降さん。：エレミヤ書」「われは光をつくり闇を創造し、平和をつくり災いを創造す。われは主にしてこれらの事をなすものなり。：イザヤ書」

もっとも、ヘブライの神の慈悲はヘブライ人に限られ、異邦人には与えられなかった。ヨシュアは、カナンの地を占領したとき、ハブルの町の住人を、「ことごとくこれを滅ぼし、息する者は一人だに残さざりき。」という状況であったが、異邦人がイスラエルに反

*12 70人訳聖書 (Septuaginta：セプトゥアギンタ)

紀元前1～3世紀ころ、アレクサンドリア(当時ギリシャ語圏)のユダヤ人共同体がヘブライ旧約聖書をギリシャ語に訳したもの。旧約正典とされる39文書の他に、現在、外典とされるいくつかの文書を含む。新約聖書が引用する旧約聖書は、この七十人訳聖書である。

現存する写本として、70人訳聖書のギリシャ語写本は、ヘブライ語写本(レニングラード写本：1008年)より古い。

なお、カトリック教会が採用しているのは、ラテン語訳(通称 **Vulgata** ヴルガータもしくはウルガータ)で、4世紀末にヒエロニムスによって完成した。その後も絶えず改訂が行われ、決定版とされているのは、**Nova Vulgata** といわれるものである。

外典

外典(がいてん)またはアポクリファ(**Apocrypha**)とは、ユダヤ教・キリスト教関係の文書の中で、聖書の正典に加えられなかった文書のこと。

「**Apocrypha**(アポクリファ)」とは、ギリシア語の $\alpha\pi\acute{o}\kappa\rho\nu\phi\omicron\varsigma$ (隠されたもの)に由来する言葉である。対義語は「正典」または「カノン(**Canon**)」

抗して死んだとしても、それは彼ら異邦人の罪のせいであるのだ。しかしながら、神はイスラエルの民に対して寛容ではなかった。驚いたことに、カナン人が頑強に抵抗したのは、神の意志でそうしたのである。また、戦利品を神に納めなかった場合、イスラエルの民全体が、異邦人の手にかかって重大な敗北を喫するようにするのである。

ヘブライの神のこの苛酷な性質は、イスラエルの民が流浪を続け、野蛮な征服行為を避けえない境遇を反映するものといえるだろう。

彼らが定住生活に入ると、その考え方は、儀式と禁忌の強調から、相互的・社会的な責任という人間的な倫理の方へ移行していった。これに伴ってヘブライの神の概念も変化した。略奪や破壊を神の意向に帰することはたやすくなくなり、悪を、神の本性に異質なものと感じるようになった。しかしながら、平穏な定住生活においても、悪の存在は否定しようがなかった。

悪を神の本性の一つと考えられなくなったとき、悪はどこから発するのか。その答えの一つは、人間の罪の結果であるとするものである。最初の夫婦（アダムとイブ）が神にぞむき、その後も、カイン、ノア、ソドムとゴモラ、などなど、イスラエル人の度重なる神との契約の違背など、イスラエル人は神に忠実とはいえなかった。しかし、神から遠ざかっていることは、世界にはびこっている悪のすさまじさを説明するのに十分とは思えなかった。

そこで、今ひとつの選択肢として考えられたのが、主なる神に対立する霊的存在、悪の支配者を策定することであった。この時以来、一神教のヘブライ教（後のキリスト教も）は、一神教と二元論の調和を図るといふ緊張を強いられることとなった。

黙示文学時代^{*13}に入って、ヘブライの人にとって、神は、善なる主とこれに対立する悪の霊に分かれるようになった。悪なる霊の源として、二つのものが考えられた。

一つは ベネ・ハ＝エロヒム（神の子ら）^{*14}、もう一つはマラク・ヤーウェ（神の使者）といわれるものである。創世記によれば、ベネ・ハ＝エロヒムは人間の女と通じて、巨人族を生んだとされる。

黙示文学の一つ「エノク書」で、エノクは死者の国（地下）に旅し、そこで「神の子らが人間の女に欲情して子をつくり天から追放された」という伝説を確認したとする。そして彼らの存在は全くの悪であると断定する。つまり、元々神の眷属であった「神の子（ベネ・

*13 黙示文学時代

紀元前200年から紀元前100年までの約100年間。（この時期、イスラエル人はシリアやローマの圧政に苦しんでいた。）

この期間に書かれた文書の多くは、予言として世界の終末のヴィジョンを報告しているため、黙示書といわれる。

*14 ベネ・ハ＝エロヒム（神の子ら）

旧約聖書の古い記述には、ヤーウェが天の会議を開くことが記されている。その会議の参加者は劣位の神々のように見える。時代が下がるにつれてこれら神の子らはその影が薄くなっていったが、ここにおいて悪の対立者として重要な役割を負わされることになった。

ハ＝エロヒム)」を天使の地位に格下げして、彼らを悪の首魁（根源）として、神性の範囲から切り離れたのである。この時、エノクは、この悪の首魁にセミアザという名称を設定した。

この名称以外にも、黙示文学の時代に、エノク以外の予言者によって、ベリアル、。アステマ、アザゼル、サタナイル・サマエル、サタン等の名前が悪の象徴的散在に対して与えられ、固定化した。中でも、サタンという名称が最も用いられた。

黙示文学の時代に至るまでの旧約聖書において、サタンという名は、かなり頻繁に使われるが、それは妨害する者、非難する者という普通名詞としてであった。つまり、神の子は神の指示に基づいて、人間を妨害し、それはたびたび行き過ぎとなって人間を苦しめたが、根本的には、神の指示・承認もとの行為であることに誤りはないのである。

もう一つの悪魔の根源は、「マラク・ヤーウェ」は神の密使あるいは使者である。「神の子ベネ・ハ＝エロヒム」との重要な違いは、神の子らは天に留まっているが、マラク・ヤーウェは世界をさすらう。^{*15}黙示文学はこれらのいくつかの神話に見える観念を統一し、サタンの概念を生成するに至る。つまり、神の子神の密使が一つ概念に結集し、墮天使、奢りと妬みによって天より追放された天使が神から独立して神性の暗黒面の人格化となり、にんげんを誘惑し、非難し、破滅させる存在となる。ただし、完全に神の意志から独立した人格となるのは、一挙にではなく、紆余曲折を伴った。

そして、キリスト誕生時までにはヘブライ人は、だいたい次のような構想を神と悪魔の間に構築した。神は、曾てのごとく、善も悪も一切について責任を持つわけではない。善性のみを有する。その一方で、悪の部分、墮天使（神の創造物である。）である悪魔によって遂行される。神が創造し指示する存在（天使）に悪を転嫁することで、神の悪に対する責任の問題を解決できたのか。その答えとして、黙示文学は、主が永劫の歳月にわたる闘争の末、悪しき天使を最終的に滅ぼすのだと答えた。それでも、パラドックスは完全には解決されていない。悪は、墮天使（悪魔）によってなされるが、墮天使は神に創造されたものであり、かつ、神に従属する存在なのである。神は間接的にせよ悪の存在を欲したのごとく見える。このディレンマに対する黙示文学の答えは、墮天使の自由意思によって悪がなされるのだというものである。この場合でも、やはり、自由意思を持った墮天使を創造したことに対して、神は責任を回避できないのではないだろうか。

一部の黙示文学は、悪魔と神の距離をさらに拡大して、悪魔に別個の原理に基づく存在という性格を与えてしまうところまで行きそうであった。（クムランのエッセネ派）しかしながら、エッセネ派といえども、唯一の神という考えを捨てるところまではいっていない。^{*16}

***15** エンジェルという名称の由来

70人訳聖書は、マラク・ヤーウェをアングロス（使者）と訳したので、これが「エンジェル」の由来といえる。

***16** クムラン宗団の宇宙

クムラン宗団における善と悪の関係は次のようなものである。

かくて、ユダヤ人（ヘブライ人）は、かつて有していた善も悪も唯一神から発するという考えを捨て、神を善のみを志向するものと主張するようになり、同時に悪を神に対立する闇の支配者として人格化する方向をたどった。しかし、一神教は忠実に守り、二元論には至らなかった。ただし、純粹な一元論でもなく、全能なる神が善であるにもかかわらず、悪が存在するというディレンマを解決することは出来なかった。

新約聖書における悪魔

新約聖書における悪魔を語るが前に、キリスト紀元が始まる少し前の、ユダヤ人の政治・文化的な状況と、これにたいするサタンとの関係（とユダヤ人が考えたこと）について、触れておく必要がある。

一言で言うと、ユダヤ人は、悪魔（サタン）という概念を導入してから、これをもっぱら政治的な反対派を攻撃する手段として用いてきたのである。例を挙げれば、紀元前6世紀中頃、有名なダビデ王が人口調査を実施しようとしたとき、猛烈な反対を受けた。人口調査は、ダビデ王の強固な意志によって結局行われたのだが、この時の反対派であった年代記作者は、この罪深い（と作者が考える）ダビデ王の行為を、天の反対勢力である悪魔がダビデの心に侵入してダビデ王に行かせた（従って、ダビデ王には責任も罪もない。）と説いた（歴代誌上）。事実としては、ダビデ王が非を認めたにもかかわらず、主は彼を罰し、疫病によって7万のイスラエル人を虐殺したのである。

前記の予言が書かれるすぐ前に、予言者ゼカリヤが、サタンはイスラエル人の中に分裂を引き起こすといっているが、その背景は次の事象である。

6紀元前6世紀初め、ネブカドネザル2世により、数千人の有力なユダヤ人がバビロニアに抑留された。（バビロニア捕囚）その後、バビロニア王国の滅亡によって、このユダヤ人は故郷へ帰ることが出来たのであるが、この時、帰還したユダヤ人とパレスチナに残されていたユダヤ人との間で、激しい権力闘争が起こった。ゼカリヤは、帰還者側にたつのであるが、彼が見たという幻の中で、主の前でサタンは残留組を代弁するのである。つまり、ゼカリヤは、残留組を、サタンのそそのかしを受け、その手先となって、正しい（とゼカリヤが考える）帰国者側を攻撃したと主張したのである。

新約聖書中の福音書において、悪魔はどのように現れ、どのように扱われたか。

この論点に入る前に、福音書の成り立ちについて触れる。

福音書は新約聖書では、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの順に記述されており、かつ、マタイが標準的なテキストとして権威を有してきたが、作成された順からいうと、マルコが最初である。^{*17}そのマルコでも、イエスの死後40年近くたってから書かれた。そして、

人間個人における善と悪の傾向は、善あり光である霊と悪であり闇である霊との宇宙的な闘争を反映するものである。

「神は世界を支配せしむべく人間を創造し、二つなる霊、すなわち真実の霊と虚偽の霊を定め神の訪れるまで人間をして二つの霊の間を歩かしめたり。」

しかし、最終的には、闇の支配者は光の主に従属することになっている。

*17

福音書の成立順

マタイとルカは、マルコを参考にさらに別の資料に基づいて書かれたという点も見逃してはならないことである。

さらに、四福音書が、正典化したのは、紀元200年頃であるが、4福音書が、当時存在したイエスの物語（伝記、語録等）として唯一のものではない。イエスの死後、書物ではないが、広い地域（小アジア、ギリシャ、エジプト、アフリカ、ガリア、スペイン等）でイエスは語られていた。これらの（新約聖書に編入されなかった）物語の内容は、正典化にともなう取捨選択の過程で徹底的に排除され失われてしまったが、19世紀末頃から、いくつかの地域で、古い資料が発見されて、ようやく、その概要を知ることが出来るようになってきた。^{*18}その内容は、じつに様々で、中には破天荒なもの、禅宗に似た教えを説くものなど、興味深いものであるが、ここでは省略する。

福音書の悪魔(サタン)は、キリストの企て(旧約の預言どおりに人々に、戒律に捕らわれない真の教えを説き、神の国の到来を告げ、かつ、死を迎えること、さらには死後に復活を遂げること)を妨げるように、人間をそそのかし、誘惑する無形の存在(場合によっては様々な人、動物、あるいは怪物といった有形物)として現れる。それは、まさに最初に定義した悪魔にふさわしい。キリストに対し、様々な攻撃を仕掛けるが、失敗に終わる。人々をけしかけてイエスを十字架上の死に追いやることには成功するが、これはイエスが(神が)予定したことを成就させたに過ぎない。この辺のキリスト教の教義(神学)には、難解な(奇妙な)ところがある。イエスの生涯は、預言どおりに進行し、預言どおりの結末に終わる。その主な進行係を務めたのは悪魔なのである。つまりイエスの受難の運命は、避けがたい決定済みのことだったのである。そうだとすると、悪魔にそそのかされたユダが神から呪われるのは、不条理なことといわざるをえない。^{*19}

閑話休題

マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの新約福音書は、特に前三者が共観福音書といわれるように、内容はほぼ共通している。しかしながら、完全に同じではなく、かなり多くの場所で異なっている。これは、作者の時代が、若干ずれていることにより、その時のキリスト

諸研究の結果、現在、定説は、マルコが最初（紀元60年代末）で、そのほかは70年から100年までの間に書かれたとしている。

*18

この100年あまりの間に、発見された主要な初期キリスト教関係の資料をあげれば、マグダラのマリアによる福音書(1896年、エジプト)、ナグ・ハマディ写本(1945年、エジプト)、死海写本(1947年、死海沿岸)などがある。

*19

ユダの裏切りに対するイエスの言葉は、
「人の子は、聖書に書いてあるとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。マルコ14-21」, (ルカ22-22もほぼ同様)
というものである。

信者の置かれた立場を反映しているのだという点を強調するのが、エレヌ・ペイゲルスである。以下は彼女の説くところの紹介に近いが、他の学者の考えもほぼ同様と思われる。

キリスト没後に徐々に拡大していたキリスト教信者は、同時にユダヤ教信者でもあった。しかしながら、ユダヤ民族の独特の習慣(割礼、食事制限、安息日の掟等の律法)や選民意識を放棄しようとする彼等は、それらに執着する大多数のユダヤ教信者からは、異端視され、迫害された。この攻撃に対し、イエスの教えを擁護し、イエスの権威を高めようとする意思に強く影響されたマタイは、手本としたマルコ福音書の内容をその方向に導いた。マタイに先立ち、それに続く福音書の土台となったマルコも、彼の属する信仰集団(イエスをメシアと考えるユダヤ教信者)のイエスについての信仰にもとづく言い伝えを書きあげたのであって、事実に基づくイエスの歴史的伝記を書こうと思ったのではない。^{*20}

マタイ

まず、マタイは、イエスに関する不都合な世評を否定しようとした。第一は、イエスの誕生は正式な婚姻に基づくものではない、という世評である。マルコ福音書は、イエスがヨハネから洗礼を受ける場面から始まる。聖霊によって、処女なるマリアから誕生するイエスは、ここにはない。しかし、ガリラヤの貧しい平民の出身であることは知られていた。

n

マタイは、メシアは、私生児ではなく、かつ高貴な生まれでなければならぬと感じた。彼は、旧約の預言書の中に、これに関する望ましい根拠を見いだした。イザヤ書にある次のような預言である。

「それゆえ、私の主が御自から、あなたたちにしるしを与えられる。見よ、乙女が身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルー神は我らとともにと呼ぶ。7-14」^{*21}

この預言に基づいて、マタイが創作したイエス誕生の物語^{*22}は、次のようなものとなった。イエス誕生時のユダヤ王(ローマの傀儡であった。)ヘロデは、新たな王の誕生を告げる新星の出現に不安を感じ、ベツレヘム周辺の二歳以下の男児を皆殺しにした。イエスは本来ベツレヘムに生まれたのだが、イエスの父が天使の警告によりエジプトへ逃れ、帰国後はナザレの寒村に隠れ住んだのだという。多くの学者は、マタイによって用意されたこの挿話は、マタイの信仰上の信念ーイエスの生涯は、イスラエル全史にわたり、これを要約・再現するものである(あるべきだ。)ーが反映されたもの(創作)であるとみる。

すなわち、イエスとモーゼ、ファラオによるイスラエル人男児の大量虐殺とモーゼの

^{*20} ペイゲルスだけでなく、学者は、福音書の作者は、歴史的事実を記録し伝えようという意志をおよそ有していなかったと考えているようである。

^{*21} この「乙女」という言葉は、ヘブライ語では **almah** で単なる若い女性を意味した。だが、ギリシャ語訳では、**parthenos** = 処女 と訳された。

^{*22} ヘロデは悪逆な王として有名であるが、幼児の大量虐殺を行ったという事実は記録されていない。

生き残り、イスラエル民族のエジプト脱出、などをイエスのケースになぞらえるのである。

このことを補強するために、またしても旧約の預言書から、次の言葉を引用する。

「私は、エジプトから私の子を呼び出した。ホセア書」

要するにマタイがいたかったのは、イエスがイスラエル史の頂点であるということである。

ここまでは、大方の学者の見解でもあるが、ペイゲルスは、このイエスとモーゼの平行関係以外に、伝統的にエジプトのファラオ(異民族)のものであった悪の役割を、ユダヤ王のヘロデに割り当てていることを重視する。

マタイの福音書に見られることは、ユダヤという民族が、そのことだけで神の祝福に預かることはないということ、神の国に迎え入れられるためには、形式的な律法を守っていることでは全く不足で、イエスの示す新たな戒律を守ることが必要であるということ、ファリサイ派は最も悪質であり、真の律法を全く理解せず、正しい律法を守ろうとする人々(イエスに従う人々・キリスト教徒)を迫害しているということである。

そして、我々の主題に戻ると、マタイはファリサイ派を悪魔に従う者、いや悪魔そのものとまで罵っているということである。古代哲学者は、競合する学派を非常に強い言葉で攻撃したといわれる。しかし、悪魔とまで呼んだのは、古代世界でキリスト教徒とユダヤ教エッセネ派だけである。そして彼等は、その対立を、宇宙的な闘争のレベルまでエスカレートさせたといえる。

ルカ

次の福音書作者のルカは、非ユダヤ人である。

ルカになると、悪魔はより明確な姿を現す。ルカのイエスは、マルコと同様に大人になって登場する。すると直ちに、悪魔が誘惑する。イエスは三度にわたってこれを退ける。ルカにおいては、神とサタンとの霊的闘争は熾烈である。

総督のピラトがイエスの罪について懐疑的であったのを、ユダヤの祭司長や議員、民衆などが有罪を主張する点はマルコ、マタイと異ならないが、ルカではピラトが何度も有罪を疑うのに対し、執拗に処刑を迫るユダヤ人集団を描いている点で、イエスを理解しないユダヤ人との反目が激化していることが窺える。ルカによるこの詳細な記述は、ユダヤ人が悪の創造者であるという信念を以後のキリスト教徒たちに思い込ませることになった。

ヨハネ

ヨハネ伝の著者は、ルカの10年後に執筆を行ったユダヤ人と考えられている。ヨハネにおけるイエスは、ルカ以上の辛辣さで、ユダヤ人多数派を攻撃する。

「あなたたちは、悪魔である父から出たものである。」

これは、紀元90年から100年頃の、パレスチナにおいてヨハネのグループとユダヤ多数派との軋轢が過激になっていたことを示す。おそらく、この頃、キリスト教徒は、ユダヤの会堂(祈祷所)から閉め出される憂き目に遭っていた。

そして、ヨハネは、その物語を、(イエス個人に関しては、そのの洗礼から始めているのに対し、)天地開闢にさかのぼって開始する。

「初めに言葉があった。……言葉の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。ヨハネ1-1, 4,

5」

ヨハネにおいては、悪魔は人間を背後から操る不可視の存在として描く。従って、悪魔は超自然的存在として触れられるだけで、その姿を現さない。その背後で行なわれているのは、善と悪の闘争、すなわち、光と闇の闘争である。ここに至って、悪魔は全宇宙的な悪の表象として現れる。ここにおいて、キリスト教における悪魔の概念が、いわば確立したといえる。

キリスト教徒は、それまで主のの属性から悪の要素を出来るだけ取り除くが、一元論を堅持するために、悪の本質をこれに比べてより卑小なものにとどめてきた。だが、イエスの出現をまって、福音書作者によって、悪の本質を（多少誇張していえば）神と対等に渡り合う力を持つ存在にまで高めるに至ったのである。これによって神の善性はほぼ完全に純化されたが、一方で、神の全能性は疑わしいものとならざるをえない。このジレンマは、結局、現在に至るまでも解消されていない。唯一かつ全能の神を信ずる宗教として、この運命は避けがたいものであると思われる。^{*23}

パーニーの浮彫, c. 1800 BCE - British Museum



参考文献

***23** ユダヤ教における悪魔

ユダヤ教における悪魔ないし悪はどうなったか。

紀元70年、ユダヤ戦争の結果、エルサレムの神殿が破壊された後、離散したユダヤ人は新しい方向へ向かった。指導者も司祭や預言者ではなく律法学者や教師となったが、彼等はキリスト教徒と異なり黙示文学の二元論的傾向を排除し、慈悲深い主という一者の支配を主張した。悪は、創造された世界の不完全な状態と人間の自由意志の誤用から生じるのであって、宇宙的な悪の人格のたくらみではないとした。

[ここに入力]

[ここに入力]

2018/6/28

スマイル会

悪魔の系譜 「The Prince of Darkness」 J・B・ラッセル 大滝啓裕訳 青土社 1990年

悪魔の起源 「The Origin of Satan」 E・ペイゲルス 松田和也訳 青土社 2000年

悪魔の文化史 「Le diable」 G・ミノワ 平野隆文訳 白水社 2004年

神の河ーキリスト教起源史 The River of God —A New History of Christian Origins

G・J・ライリー 森夏樹訳 青土社 2002年

確認のため参照したもの

神の歴史 「A History of God」 K・アームストロング 高尾利数訳 柏書房 1995年